

# 村上春樹と東アジア

— 都市現代化のメルクマールとしての文学 —

藤井省三

\*本稿は香港大学中文系開催による「廿一世紀中国學術研究前瞻國際研討會」(二〇〇一年一月一七日〜一九日)において中国語で発表した報告の日本語原文である。

## 一 現代中国文学史研究と社会史的方法

私はこれまでいわゆる「兩岸三地」の現代文学を研究してきた。一九九七年刊行の共著『新しい中国文学史』の序文で、私は次のように記している。

本書のねらいは、中国の元・明・清から現代に至るまでの文学史を作家・作品の解説としてではなく、社会史的視点で語ることにある。

彼または彼女、あるいは彼らは、その時代にいかにして文字を知り、文章作法を学び、先行する作品群に出会い、自らの表現を作り出していったのか。その作品はどのように筆記され、印刷され、読者たちに届けられたか。そして読者はこれをどのように先行する作品群の中に位置づけたのか。その時、批評はいかに作用したのか。そもそも読者とはどのような人々であったのか。そしてこの読書体験を得た読者層から続いてどのような新作者・

新作品が登場してきたのか……

本書ではこのように問いかけつつ、その時代の識字率から印刷技術、出版制度、そして書籍の流通制度、さらには文化人の交際圏から教育制度までが検討されている。作品と読者層とを切り結び、結ぶイデオロギーの分析にも注目した。すなわち作者が生産され、その作品が流通し、これを読者が消費し、その全過程から批評・新作品が再生産されていく過程として文学史を語っているのである。題して『新しい中国文学史』と称するのは、このような社会史的試みによるものである。

そして私の担当である後半第二部「近現代の中国文学」にも「都市物語としての近代文学」という題名の「序文」を付して具体的な方法論を次のように説明した。

近代文学の部ではこのような困難にして魅力に富んだ近代中国およびその文学を、北京・上海の二都を主な手がかりとして読み解いてみたい。北京は明清以来、皇帝の都であり、上海はアヘン戦争（一八四〇）後に発展した租界都市である。文化史における新興上海の挑戦と古都北京の変貌の物語は、中国における近代化のさまざまな様相を語ってくれることであろう。中国では二つの大都を中心として行政・経済・教育の諸機構が体系化され、出版文化が発展した。中国人は二都をめざして「旅」することにより、未知の人々と共通の感情を抱き共通の認識に到達し「想像の共同体」＝国民（ネーション）を形成した（B、アンダーソン、一九八三）といえよう。

北京・上海を手がかりに近代中国およびその文学を読み解いていく際、キーワードはメディア＝知の媒体と都市の社会学である。すなわち新聞・雑誌などのマスメディア、学校・留学などの教育制度と、このメディアを構築するとともに作家や編集者、評論家そしてほかならぬ読者を培養した都市の諸制度に注目したい。

『新しい中国文学史』を書きあげたのち、私が着手した文学史関係の仕事には三種類ある。一つは『魯迅「故郷」の読書史』<sup>(2)</sup>で、同書の「序」で私は次のように述べた。

「故郷」の登場以来現在に至る七〇年あまりの間に、この作品を手にした読者数はおそらく十数億という膨大な数に達することであろう。歴代の読者に対して民国期には文芸批評家と教科書編者そして国語教師が読者に解釈を提示し、人民共和国期ともなれば共産党文教テクノクラートが解釈を強いてきた。これらの解釈に誘導されまた反発しつつ、読者たちは自らの時代状況に即した新しい読みを形成してきたのである。その意味で、「故郷」は不断に新しく編み直されてきたテクストといえよう。

本書は「故郷」というテクストを不断に織りなしてきた二〇世紀中国における読書の歴史を考察するものである。それは「故郷」を軸として七〇年にわたる国家イデオロギーのパラダイムを描き出そうとする試みでもある。言い換えるならば、これは「故郷」というテクスト生成過程に映じる近代中国文学の生産・流通・消費・再生産の物語なのである。

つまり同書は『新しい中国文学史』の方法を魯迅の短編「故郷」一篇に絞って適応したものである。

二つ目は台湾文学研究である。私が台湾文学を読み始めたのは八〇年代末のことで、それは李昂の小説『夫殺し』に衝撃を受けたのがきっかけであった。やがて私の関心は戦前期の台湾文学にも広がり、日台の研究者が、三〇年前に尾崎秀樹により構築された大日本帝国の庄迫と台湾人民の抵抗という二項対立の構図を墨守していることに對し、疑問を抱くようになった。そこで『新しい中国文学史』の手法を応用して植民地期台湾文学の誕生と成熟を論じてみた。これは「『大東亞戦争』時期台湾読書市場的成熟和文壇的成立——從皇民化運動到台湾國家主義之道路——」と

いう題名で、一九九四年に台湾・清華大学で開催された「日拠時期台湾文学国際学術会議」で報告し、のちに日本語版を拙著『台湾文学この百年』に収録した。<sup>(3)</sup>

三つ目は香港文学研究である。一九九七年の香港返還を契機に日本でも香港文化への関心が高まり、私もきちんとした勉強をする必要を痛切に感じた。そこで一九九八年夏に一月、香港大学に訪問学人として滞在しながら、香港文学の形成と香港アイデンティティの成熟との関係を調査したのである。一九四九年の人民共和国建国以来、一九九八年の台湾全面自由化までの四〇年間、香港は中国・台湾の間にあつて国家機構の過酷な統制を免れ得た「公共空間」であつた。そこでは経済発展に伴い独自の文化が成熟し、特に八〇〇九〇年代にかけては市民層が香港人アイデンティティの確立を強く求めた。たとえば「香港文化」という概念自体が七〇年代末に定着したものであつたのだ。

香港紙『華僑日報』が一九四八年以来一九九五年まで毎年刊行していた総合年鑑に『香港年鑑』がある。これはB5版サイズの年鑑で、その「第二篇 香港全貌」には「概説」から始まって、以下「一年来の香港政治」「一年来の香港財政」「一年来の香港貿易」「一年来の香港銀行」……と政治・経済・商業・教育・マスコミから「一年来の香港牧畜」「二年来の香港鉱業」に至るまで三〇数項目が並んでいる。各項目は一頁から一〇頁ほどあり、第二篇全体で百数十頁に及ぶ。それは万華鏡のような香港社会のあらゆる局面を網羅しているかのようであり、まさしく「香港全貌」を私たちに見せている。

しかしこの「香港全貌」は久しく「二年来の香港文化」という項目を欠いていた。『香港年鑑』に「香港文化」が登場するのは実に創刊以来三十年後の一九七七年のことであつたのだ。ところが二年後の「一年来の香港文化」欄は早くも小見出しのトップに「今日の香港はもはや文化砂漠にあらざ」を掲げ、さらに三年後の『香港年鑑一九八二』は「今日の香港は文化オアシスになりつつある」と宣言するに至っている。こうして見ると、少なくとも『香港年鑑』では七〇年代末から八〇年代初頭にかけて、突如「香港文化」が登場し、未だ「文化砂漠」として取り残されている

周辺地域に対し「文化オアシス」として自らを誇るに至ったといえよう。

香港大学での調査に際し、私は基礎的な文学・社会学・人類学の研究を涉猟した上で、李碧華 (Lillian Lee) の作品を分析し、香港文学・映画とアイデンティティ形成との関わり的一端を研究してみた。その成果は一九九九年に香港・中文大学で開催された「香港文学国際研討会」での報告と、その直後に香港科技大学・中文系で行った三回の連続講演「香港文学——日本視野」で発表した<sup>(4)</sup>。

このように社会的視点から文学とネーションないしは地域アイデンティティの形成との相関関係を考察していく私の文学史研究の方法は、中国から出発して台湾・香港へと対象を広げてきたのである。

## 二 東アジアにおける「村上春樹現象」

さて現在の「両岸三地」においては、「村上春樹現象」が続いている。村上春樹は一九四九年生まれ、六〇年代末に故郷の芦屋・神戸を離れて東京の早稲田大学演劇科に入学、七三年の卒業後、ジャズ喫茶を経営しながら書いた小説『風の歌を聴け』を一九七九年に発表して文壇にデビューした。その後、『一九七三年のピンボール』(一九八〇)、『羊をめぐる冒険』(一九八二)を発表し続け、一九八七年刊行の『ノルウェイの森』は二年足らずで上下合計発行部数が四〇〇万部に達し、四年後に文庫化されると総部数は一〇〇〇万部を超えるという記録的な成功を収め、「村上春樹現象」と称された。その後も『ダンス・ダンス・ダンス』(一九八八)、『ねじまき鳥クロニクル』(一九九四〜九五)、『神の子どもたちはみな踊る』(二〇〇〇)と執筆し続けている現代日本文学を代表する作家である。

日本の「村上春樹現象」は『ノルウェイの森』をきっかけとして、東アジアに広がっていった。まず台湾では故郷出版社がこの作品を五人の訳者に分担して翻訳させ、それを編集者が繋いでいくという荒技を行い、一九八九年に刊行してベストセラーとなった。続けて一九九七年に時報文化出版が同書を頼明珠訳で刊行し、これは二〇〇〇年六月

までに一七刷りを重ねている。その後、故郷出版会社が村上春樹の作品数点を出版して倒産するいつぼうで、時報文化出版は二〇点近くの村上文学を刊行し続けている。台湾では「非常村上(すつごくムラカミ)」という流行語まで生まれた。二〇〇〇年一〇月香港・嶺南大学で開かれた張愛玲国際学会では、台湾の若手作家林俊穎が「張愛玲那美麗而蒼涼的手勢、已經被村上春樹變化多端的都市神話取代。」と報告している。<sup>(5)</sup>

香港の博益出版が『ノルウェイの森』を葉蕙訳で刊行したのは一九九一年、その後二〇〇〇年までの一〇年間に二〇刷りを重ねている。一九九八年九月に私が香港で観たドタバタ喜劇映画『超級整蠱霸王』にはヒロインで看護婦役の朱茵が九広鉄道の駅ホームで通勤電車を待つ間にも読み耽っている小説をうっかり落とすと、片思いの喜劇役者葛民輝が飛びついてこれを拾うというお笑いの一場面がある。表紙が大写しされるとその小説とはなんと『ノルウェイの森』で、この文芸書と三枚目男優との落差でもう一度大笑いさせると言う巧みな演出だった。このように『ノルウェイの森』は通俗映画のギャグとして通用するほど広く知られており、村上文学を抜きにしては、もはや台湾・香港の文化は語れないのではあるまいか。

そして最近、台湾・香港の「村上春樹現象」が上海・北京へと飛び火したという。一九九九年一月一七日号の中国の週刊書評新聞『中華読書報』によれば、漓江出版社が一九八九年に『ノルウェイの森』を出版したときにはそれほど反響はなく、印刷部数も一九九六年で一万五〇〇〇冊、九八年では一万二〇〇〇冊で、並みの売れ行きだったという。ところが九八年九月の改版に際して装丁を改め詳しい解説などを付けたところ急に売れ行きが急上昇し、上海だけで半年に一万余冊以上が捌け、北京の学園地区である海淀区のある書店では一カ月で四〇〇〇冊を売り切るなど、この年だけで合計六万冊が売れたという。

私が北京から入手した同書の奥付によれば訳者は林少華、一九九六年七月第一版、二〇〇〇年九月第二版第一〇次印刷で、合計二一六〇〇〇冊となっている。第二版第一〇次印刷だけでも六万冊出版しており、その売れ行きは衰

えるどころかますます盛んになっているようである。

この一、二年話題になっている中国の若い作家たちも、自らの作品の中で「村上春樹現象」を演出している。たとえば衛慧（一九七三）の『上海寶貝』（瀋陽・春風文芸出版社、一九九九）一二三頁には次のような描写がある。

「想喫什麼、中餐、西餐、還是日本菜？」

（中略）「日本菜。」我說。這城市文化有嚴重的親日傾向、安室奈美惠的歌、村上春樹的書、木村拓哉的電視……また北京の男性作家、石康（生年不詳）の最初の長篇小説『支離破碎』（長春・長春出版社、一九九九）にも村上が登場する。主人公は三一歳のテレビドラマ作家の「ぼく」、彼は仕事の声がかかれば、ホテルで缶詰となって一〇回分のドラマを一気に書きあげ、暇なときにはディスコやバーに繰り出しガールハントに精を出す、有り金すべて巻き上げられたり性病を移されたりが関の山。こんな「格調最低」を自認する「ぼく」にも小説家としての才能を見込んで陳小露（チェン・シアオル、ちんしょうろ）が惚れてくれる。彼女は性格的に『ノルウェイの森』の緑を思わせる女学生だが、台湾人ビジネスマンの愛人となって携帯電話からマイカーまで持っている。一六二頁で彼女は「ぼく」を次のように激励するのだ。

「備以後不許写王朔那種書騙小姑娘、聽見了嗎？……我告訴備啊——備應該写村上那種、備看過村上嗎？」

「看過『跳跳跳』。」

「『挪威森林』備沒看？」

「我有、還沒來得及看。」

「回去看、回去看、特來勁、真的特來勁。」

このように「村上春樹現象」とは上海・北京も今や現代東アジア共通の文化といえよう。だがそれにしても台北・香港における村上現象と、上海・北京における現象とのあいだに一〇年前後の時間差があるのはなぜだろうか。

### 三 現代都市成熟のメルクマール

『ノルウェイの森』を読んだことない人々の中には、それが若い男女の「カッコイイ」都会生活を描いた小説と思いでいる人がいる。しかしそれは主人公で語り手の「僕」の恋を軸にした深い喪失体験の物語なのである。物語は一九八七年に「僕」がジェット機でドイツ・ハンブルク空港に着陸する場面が始まる。このとき三六歳の「僕」は突如、一八年前、すなわち一九六〇年代末の恋愛体験を思い出し、深い喪失感に改めて打ちのめされているのだ。六〇年代後半の日本は平均経済成長率一七・六％（ただし名目、実質成長率は一一・一％）を達成しており、高度経済成長のまった中であつた。都市は急速に変貌し、懐かしい風景は次々と消えていった。『ノルウェイの森』の恋人たちが東京を徘徊するのは、まさに滅びつつある風景を求めてのことだつたのだ。それから一八年が経過し、「僕」が青春を終えようとするとき、すなわち八〇年代後半の日本は平均経済成長率六・一％（実質成長率は四・九％）と三分の一近くにまで下降している。逆に一九七五年に四四五〇US\$だつた一人あたりのGNP（国民総生産）は、八七年には一万六二七一US\$へと四倍近くに増加している。

いっぽう、台湾で「村上春樹現象」が生じた一九八八年とは、前年七月に戒嚴令が解除され、同年一月に蔣経国が急逝して李登輝が總統に就任するという変化の大きい時期であつた。一九四九年に国共内戦で惨敗して台湾島に逃げ込んだ国民党は、その前後に通貨改革と農地改革を断行して経済安定の契機をつかむ。さらに翌年六月の朝鮮戦争勃発後は中共の台湾攻略阻止へと政策転換したアメリカの大量援助を受け、六〇年代半ばには大胆な外資導入を行い、ベトナム戦争特需を梃子として高度経済成長を実現し、農業国から工業国へと転換した。一九六四年から一〇年間の経済成長率は一一・一％に達し、急速な産業化にともない、農民人口は一九五二年から八五年までの三〇年ほどの間に五六パーセントから一七パーセントへと激減し、都市化が進行している。そして一九八六年にはその後急成長した



第三次産業が第二次産業を追い抜き、民間消費の対GNP比への比率を増した。GNP成長率も八七年の一三%近い高率を最後に六%前後に落ち着いている。一人当たりのGNPは一九七〇年の三八九US\$から一九八八年の六〇四五US\$へと伸びた。日本から「村上春樹現象」が伝わってきたとき、台湾もまた日本と同様に高度経済成長を終えて、過剰な都市化、都市風景と人間関係の激変という結果を目の前にしながら成熟の時期を迎えようとしていたのである。

香港も台湾と同様にGDP（国内総生産）成長率は六〇年代に実質八・八%、七〇年代にも九・〇%（名目一九・四%）と高い伸びを続けたものの、八〇年代には六・五%（名目一五・四%）、九〇年代前半には五・七%（名目一四・三%）と落ち着きを見せている。これにともない、六〇年代の第一次工業化を衣服・繊維産業が担ったのに対し、七〇年代には業種別GDP成長率で建設業と金融・保険・不動産業等がそれぞれ二六%以上となり製造業の一七・四%を圧倒したが、八〇年代になると卸小売・貿易・飲食・ホテル業と運輸・倉庫・通信業がそれぞれ一七・一八%に達し、建設業、金融・保険・不動産業等の一三%に水を開けている。

就業人口も製造業は一九八二年の九〇万人から減り続け、九一年に卸小売・貿易・飲食・ホテル業に、九三年には運輸・倉庫・通信・金融・保険・不動産業等に追い抜かれている。香港で『ノルウェイの森』が刊行される一九九一年とは、香港社会が大きく転換した時期であったのだ。

中国では文革末期には農村・都市全般にわたる国家経済の行き詰まりが顕著となっていた。鄧小平体制はこれを解消するため、七〇年代末以来、対内的には経済改革、対外的には開放政策を実行することを主要な課題とした。一九八九年六月にはあの悲惨な「血の日曜日」事件が起きて、中国経済は一時停滞するものの、一九九二年鄧小平最後の号令により市場経済化路線を再度邁進することとなる。GNPの伸び率は一九九二年一四・二%を記録したのを始め九五年までは一〇%台を維持していたが、九六年に九・六%と一〇%を割り込み、九七年には八・八%、九八年と九

九年には公式発表でそれぞれ七・八%と七・一%と陰りを見せ始めている。そのいつぼうで、全国一人あたりのGNPは一九七八年の三七九元から九九年には六五四六元にまで増加してきた。しかも上海と北京に限って言えば、それぞれ三万〇八〇五元(三七二US\$)と一万九八〇三元(二三九二US\$)にまで達しているのである。<sup>(6)</sup>前者のばあいではすでに六〇年代末、『ノルウェイの森』の時代の日本経済のレベルに達しているのである。

このような中国の経済統計から、九〇年代の高度経済成長が一休みするいつぼうで、上海・北京の市民が中進国並みの経済を謳歌し始めた九八年に「村上春樹現象」が生じたことが理解できるのである。

以上、日本と台湾・香港・中国における高度経済成長の終焉または一段落と、「村上春樹現象」との関連について述べてきた。村上春樹の受容とは、東アジアの都市にとって現代都市としての成熟度のメルクマールと言えるのであるまいか。

それにしても、台湾と香港はほぼおなじような高度経済成長の歴史を歩みながら、台湾における「村上春樹現象」はなぜ数年も早く生じたのであろうか。実は台湾では『ノルウェイの森』翻訳に先立ち、一九八五年から頼明珠が村上春樹の翻訳を刊行し始めていた。<sup>(7)</sup>しかも村上文学の香港版の訳者が台湾人である点も興味深い。

また『ノルウェイの森』のばあい、台湾版二種、香港版一種、中国版二種(そのうち一種は未確認)、合計五種類もの中国語訳が刊行されている。各地における文化界や読者大衆の反響、および五種の版本相互間の翻訳・装幀・編集等の異動を比較することにより、村上文学を鏡とした「兩岸三地」の比較文化研究も可能となるであろう。

私は自らの現代中国文学史研究の発展として、二二世紀にはこのような「東アジアにおける村上春樹の受容」というテーマを考えており、本稿の中国語訳者でもある台湾・中央研究院文哲研究所助研究員の張季琳氏と共同研究を進めているところである。諸先生方から是非ともご教示頂きたい。

注

- (1) 『新しい中国文学史』(大木康氏と共著)一九九七、京都・ミネルヴァ書房、p.278
- (2) 藤井省三『魯迅「故郷」の読書史——近代中国の文学空間』一九九七、東京・創文社、p.340。同書は二〇〇二年に董炳月訳により北京・新世界出版社より出版された。
- (3) 藤井省三『台湾文学の百年』一九九八、東京・東方書店、p.252。
- (4) 藤井省三著、劉桂芳訳「小説為何与如何讓人「記憶」香港——李碧華「胭脂扣」与香港意識」黄維傑主編『活潑紛繁的香港文学——一九九九年香港文学國際研討會論文集 上冊』香港・中文大学出版社。陳国球編、梁秉鈞・藤井省三等著『文学香港与李碧華』台北・麦田出版有限公司二〇〇〇。香港文化の誕生と香港アイデンティティをめぐるって、日本語では拙著『現代中国文化探検——四つの都市の物語』(岩波書店一九九九)でも論じた。
- (5) 林俊穎「尋找張愛玲在台湾的接棒人」『香港文学』第一九二期、二〇〇〇年二月号。
- (6) 『経済統計に関しては以下の書籍を参考にした。』平凡社百科便覧』東京・平凡社一九八六、『同改訂版』平凡社一九九三。施昭雄・朝元照雄編著『台湾経済論』東京・勁草書房一九九九。野村総合研究所(香港)有限公司編『香港と中国』東京・朝日新聞社一九九七。国家统计局編『中国統計摘要2000』北京・中国統計出版社。
- (7) 村上春樹の台湾での初訳は『新書月刊』第三号一九八五年八月掲載の頼明珠選訳『村上春樹的世界』である。